

自然化粧品を日本に広めた

リマナチュラル株式会社

岩渕春雄社長インタビュー 後編

よそおうということ 自然化粧品の歴史

「自然化粧品」と聞くとどんなイメージがわきますか？
ナチュラル志向や、敏感肌の人が使っているもの……という
イメージだけではなく、スローライフの広がりとともに、
「オーガニックコスメ」「ノンケミカル」などの言葉も見かける
ようになってきました。そんな自然化粧品を、高度成長期
真っ只中の50年前から生産販売していたリマナチュラル
株式会社の岩渕社長に聞く、自然化粧品や、日本の
化粧品文化の歴史の後編です。





リマナチュラル株式会社

代表取締役社長

岩渕 春雄

(いわぶち はるお)

使っている化粧品の

原料を知らない消費者

——化粧品の害も高度成長期に出てきた
ということでしたか？

岩渕 そうです。肌トラブルについて、
当時、メーカーは消費者側に落ち度がある
と主張しました。原料の問題を認める
ことはなく、あくまでも和解で話をつけた
とニュースになりました。国の捉え方と
しては、化粧品はアクセサリーのような
位置づけ。効能効果をうたうことはでき
ません。そのため原料も、あまり配慮
されず、化学物質が非常に多く含まれて
います。一般的なメーカーでは石油系
オイルが使われていますが、最近「ミネラル
オイル」と表記されているのを、ご存じ
でしたか？ 昔は、流動パラフィン、固形
パラフィンなどと呼ばれていました。が、
響きのいい言葉に変わってきています。
化粧品原料としての石油、つまり鉱物油は、
被膜にはなり得ますが、肌との親和性は
ありません。紫外線を素通しするので、

油焼けするなどのデメリットさえあり
得るのです。

化粧品の宣伝も、最近は少し変わって
きましたが、「いかに美しくなるか」に
訴求するCMが多く、「のびがいい」
「肌なじみがいい」などが購買意欲を左右
します。たとえば、クリームには、通常、
水と油と乳化剤が入っていますが、どの
水を使うか、どの油を使うか。混ざり
合わない水と油を、どんな素材で合わせる
のか。その成分や製法については、不透明な
ままでも売れる。それが、つい最近までの
化粧品のマーケットです。

ヨーロッパは「オーガニック認証」に
ついては厳しいというイメージがあります
よね。でも日本では国による認証制度が
ないため、実は、オーガニック認証成分
が微量でも使われていたら、仮に99%
が日本では良しとされている成分であつ
ても、「オーガニック化粧品」と名乗れる

という側面を持っています。なかには
粗悪品もあるのですが、イメージだけで
売れる。知らないのは消費者だけです。

——消費者はどうすれば……？

岩渕 勉強するしかないでしょうね。
現状、化粧品は全成分表示になっています
よね。それまでは、アレルギーを起す
可能性のある成分がある場合だけ表示
されていました。成分自体、認可制だった
ため外国の化粧品会社は、日本独自の
ルールを嫌い「日本は閉鎖的だ」と批判。
表示を条件に自由化されました。各成分
の良し悪しを判断するのは、消費者自身
に委ねられることとなったのです。

——消費者が学ぶことを面倒くさがるので
いい商品が浸透しないのでしょうか？

岩渕 それもあるかもしれませんね。
そんな流れのなかで、草の根的な広がり
を見せているのが自然化粧品です。前号で
お話ししたように、自然食業界から始まり、
安全性を求めてファンが少しずつ増えて
います。欧米と日本では、そもそも考え
方が違います。欧米は「化粧品」を考
え、肌をキャンパスとして捉えています。
日本では「化粧品」は儀式や神事が発祥と
いわれ、古来、自然を崇め、自然の摂理
に従い、気候風土に合う食べ物を食べて
生きてきました。それが、身土不二、一物
全体など、自然食の考えにもつながって
いるわけです。

「肌」は生命維持装置

化粧品の素材に目を向けて

岩瀧 人間の肌における本来の姿として、

汗（水）と皮脂（油）を分泌することで、表面状態をコントロールしています。汗は、皮膚表面を弱酸性に保つことで細菌の繁殖を抑制し、皮脂は、水分の蒸発を予防し乾燥から防いでいます。弊社では、化粧品にふさわしいのはこの汗と皮脂に近いものと考えます。汗の代わりに、天然水とフムスエキス、皮脂の代わりに、最も近いと考えられる「椿油」を使っているのです。

日本原産の植物である椿には、皮脂の主成分である「オレイン酸」が自然界で最も多く含まれていたという奇跡的な事実があります。古来、日本人は椿油に親しんできた歴史があるわけで、まさに身土不二……先人の知恵のすごさです。ちなみに、椿油ほどではないものの、オリーブ油もオレイン酸が主成分で、こちらはヨーロッパで多用されています。

これも身土不二ですよ。

弊社では天然水を化粧品原料にする発想が、1990年ごろからありました。ミネラル分が沈殿物やその他反応を起こすことを避けるために、精製水（純水）を使用するのが当たり前だった当時、実は、とても画期的なことだったのです。地下水ではなく、湧き水を使用するべく、自社で水場を探したのも、自然の摂理に倣うことを大切にしているがゆえです。現在、秩父の山奥に湧いている天然水を使用しています。もちろん飲める水です。

——秩父を選ばれた決め手は？

岩瀧 名水は日本中にありますが、秩父は近場でご縁があったのです。秩父古生層といわれる一億年以上前の花崗岩盤をゆつくり通ってくる水は、ミネラルバランスがよく美味しい。今湧いている水は40年前の水です。一年中11度で、春夏秋冬、温度が安定しており、冬は

水蒸気が出ています。食運動の原点は水です。どんな野菜がいいのか、どんな食べ物がいいのか、すべて水に関係します。人間の体も水分が60〜70%。血液も、リンパも水分。非常に大切なのです。

——「化粧品」は「体内に入れていい」という感覚がないかもしれません……

岩瀧 ハワイに行くとき金箔を全身に塗って、じっと動かないバフォーマンスをしている人がいますが、あれでは皮膚呼吸ができませんよね。人間は、五臓六腑の問題には敏感です。皮膚は何も言いませんが、金箔などを塗布して皮膚呼吸が止まってしまうと命に関わります。皮膚も、いわば臓器です。皮膚の役割は、発汗して体温を調節したり、紫外線や乾燥から身を守ったりすること。つまり、皮膚は生命維持装置なんです。そう考えると化粧品の成分は、皮膚呼吸を止めるようなものは、可能な限り避けたいですよ。

「きれいになりたい」という気持ちは、もちろんあるでしょう。内面の美しさに目を向け食生活に配慮するのであれば、化粧品の原料についても、「食」の目線で考えるべきです。排泄能力を持つ人間からすれば基本的には強いといえますが、その排泄能力を超えるものが、石油系の素材や添加物に多いのです。若いうちはいいとして、歳を重ねるに連れて排泄能力が弱くなっていくので注意が必要です。

リマナチュラルの椿油のふるさと

リマナチュラル化粧品で使用している椿油は、日本一の名産地、利島（としま）で生産されています。利島は伊豆七島のひとつ。島の周囲はわずか約8キロ、人口約300人の小さな島です。

利島には、日本固有の原産種「ヤブツバキ」が20万本以上あり、島全体を覆っています。利島での椿油生産の歴史は250年以上。江戸時代には生産が行われていたそうです。

搾油できる実を結ぶまでには植樹から20年以上かかります。農家では毎年秋に椿の実を拾い集めます。

四方が海の利島では、昔は貯めた雨水が飲料水でした。そのため、農業混入を防ごうと自然と無農薬の農業が営まれ、水道が普及した今でもそれは続いています。リマナチュラル化粧品にはこうして大切につくられた一番搾りの精製椿油を配合しています。



リマナチュラルオーガニック®
 右)セミハードムース 200g 1,944円(税込)
 中)ヘアクリーム 90g 2,160円(税込)
 左)椿油ヘアスプレー 95g 1,296円(税込)

肌そのものが美しければ

「見せるだけの化粧」は必要ない

岩淵 弊社のとあるスタッフが若いとき

に一般の化粧品から弊社の化粧品に変えたところ、「ものたりない気もするけど角質が柔らかくなった」と言っていました。それが当たり前のことです。肌の表面は異物が入ってくると硬くなるものです。化粧を異物として捉え、守ろうとして、肌が強くなっていったわけです。でも、使っている化粧品が肌に近い素材であれば、肌は硬くなる必要がありません。だから角質が柔らかくなり、シミもできにくくなるのです。

——肌なじむということですね？

岩淵 角質層を通じて有棘層（表皮の深い層）に入っていた異物によってシミが生まれます。化粧品によるシミ。ほかに臓器の異常によつてできるシミもあります。これについては化粧品では対応できませんが、化粧品によるシミは当然、化粧品自体を良質なものに変えたとターンオーバー

岩淵 そうです。人には防衛本能が備わっているだけなのです。

——本来、からだの内側を重視すると、結果、外がきれいになるはずですよ？

岩淵 そうです。からだの外と中を分けて考えているから、「見せるだけの化粧」になつてしまうのです。

——西洋医学の対処療法と似ていますね

岩淵 そうですね。東洋医学は、食食同源、人間のからだを「生命体」と捉えている。生命体として化粧する場合はどうあるべきか。外見だけではなく、内面の健康がなければ、本当の美容にはならない、という考え方です。

化粧をして素肌を隠そうとしなくても、本来、身体にいいものを食べていけば、肌そのものが美しいはずなんです。

年齢によつて、さまざま「美」があります。「歳を取つたら化粧をやめる」という考えが昔はありました。でも、僕は、歳を重ねるほど化粧したほうがいいと思います。化粧することで気持ちが若返りますし、人に会いたくなり、外に出たくなります。

きつと、長寿の秘訣でもあるでしょう。化粧は、人の心を、ひいては、その人の人生や、周りの人を豊かにしてくれるのではないのでしょうか。

取材を終えて

未っ子の私は甘えるのが得意。その代わり「選択」「決断」に慣れていない。しっかりものの母と姉に甘えて、人任せにしてきた。母が先回りしてダメ出しするので、決断に自信が持てず悪循環になつていた。そんな私が選んだ一度目の結婚は、やはり失敗。独身時代は母に、結婚したら夫に、舵を任せ、顔色を伺い、その実、責任を押しつけていたのだろう。三人の子を抱えて離婚してから、重責に負けそうになりつつも、自分を取り戻してきた。もしかして、いい子、いい妻を演じ、ベルソナを被つてきたからこそ、「化粧」をしたくなかつたのかも知れない。

そんな私が「化粧で気持ちは変わる」を最近、実感している。ぼさぼさのくせ毛、年輪の刻まれた顔、少しずつ整えようと、自然と背筋が伸びて、笑顔に変化していくのがわかる。

心は磨いてきた。外見はどうだ。そう考えるとき「きれいになりたい」と思うようになつてきた。ただ、やはり違和感のあるものではなく、肌に、からだになじむものを使いたい。それが、「自分を大切にすること」にも、つながるのではないだろうか。



編集室 Roots 代表
藤嶋ひじり
(ふじしま ひじり)

「らくなちゅうらる通信」編集。たまに保育士。日経BP社、小学館、NHK 出版の取材・執筆など。インタビューは1,600人以上。元シングルマザーで三姉妹の母。歌と踊りが好き。合気道初段。